

着衣動作尺度における検者間および検者内信頼性の検討

Inter-rater and intra-rater reliability of the Upper-Body Dressing Scale

○遠藤有紗^{*}, 鈴木誠^{**}, 千葉直之^{*}, 豊田厚美^{***}

(*桜台江仁会病院, **新潟医療福祉大学, ***札幌江仁会病院)

Arisa Endo^{*}, Makoto Suzuki^{**}, Naoyuki Chiba^{*}, Atsumi Toyota^{***}

(*Sakuradai Koujinkai Hospital, **Niigata University of Health and Welfare,

***Sapporo Koujinkai Hospital)

Key words : 着衣動作尺度, 脳血管障害, 信頼性

問題と目的

着衣動作練習を片麻痺を呈した対象者に実施する場合, 障害を生ずる前とは違う新たな行動連鎖を学習する必要がある。しかし, これまでの着衣動作の評価では行動連鎖の定義が不明確で詳細な評価は困難であり, 動作練習自体も曖昧な行動連鎖と手がかり刺激の元で行われている。

近年鈴木ら(2008)によって, 着衣動作に関する行動連鎖と検査者の提示する手がかり刺激を統制した Upper-Body Dressing Scale (UBDS) が開発されているが, 着衣動作尺度の検者間および検者内信頼性については十分には明らかとなっていない。

本研究では, 着衣動作尺度の検者間および検者内信頼性を明らかにすることを目的とした。

方法

【被験者】脳血管障害による片麻痺患者 9 名 (女性 1 名, 男性 8 名, 脳梗塞 6 名, 脳出血 3 名, 右片麻痺 3 名, 左片麻痺 6 名)

【検査者】作業療法士 5 名 (臨床経験年数 2~5 年目, 20 年目)

【手順】

① **着衣動作の撮影**. カーディガンを用いて UBDS に基づいた着衣動作を実施し, その様子を動画撮影した。

② **検者間の評価**. 2 人の検者が同一動画を別々に見て UBDS による評価を実施した。

③ **検者内の評価**. 1 人の検者が同一動画を 1 日以上の間隔を空けて 2 回見て評価を実施した。

【分析】Spearman 順位相関, 級内相関係数, Bland-Altman-plot を用いて検者内および検者間信頼性を分析した。

結果

【検者間信頼性】Spearman 順位相関および級内相

係数は, $r = 0.996$ および $ICC = 0.999$ ($P < 0.0001$) だった (図). Bland-Altman-plot では 2 検者間における測定値の差の平均がゼロに近似し (-0.11), 全データが 2 標準偏差内にプロットされた。

【検者内信頼性】Spearman 順位相関および級内相関係数は, $r = 0.987$ および $ICC = 0.999$ ($P < 0.0001$) だった (図). Bland-Altman-plot では 2 測定間の差の平均値はゼロに近似し (-0.22), 全データが 2 標準偏差内にプロットされた。

【UBDS 項目別得点】検者間, 検者内共に UBDS における項目別一致度も高値だった。ただし, 左片麻痺患者の方がやや UBDS 得点が低い傾向にあった。

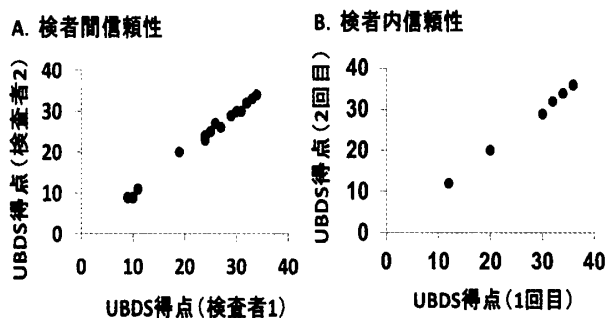


図 UBDS 得点の散布図

考察

検者間, 検者内共に UBDS の総得点および項目別得点の一致度が高かったことが明らかになった。このことから, UBDS は良好な信頼性を有しており, 臨床における有用な尺度になり得るのではないかと考える。今後は, UBDS を病棟スタッフが評価した時の一致度や情報の共有方法等, 脳血管障害患者の日常生活向上のための効果的なアプローチ方法について検討していきたいと考える。